

潰瘍性大腸炎患者におけるdysplasiaの経過と発癌に関する検討-厚生労働省研究班分類に基づく検討-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米澤, 麻利亜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032600

主論文の要約

潰瘍性大腸炎患者における dysplasia の経過と発癌に関する検討
—厚生労働省研究班分類に基づく検討—

東京女子医科大学消化器内科学教室
(指導：徳重克年教授) ㊞
米澤 麻利亜

東京女子医科大学雑誌 第 87 巻 第 4 号 96 頁～107 頁 (平成 29 年 8 月 25 日発行) に掲載

【目的】

潰瘍性大腸炎 (ulcerative colitis: UC) 患者は増加傾向にあり、長期経過例の UC には大腸癌 (colitic cancer) が高率に発生することが知られており、今後 colitic cancer も増加することが予想される。前癌病変とされている dysplasia は colitic cancer の早期発見において重要視されており、今回 dysplasia の進展および colitic cancer の早期発見の可能性を検討した。

【対象および方法】

当施設で下部消化管内視鏡検査を施行した UC420 例を対象とした。厚生労働省研究班の病理組織学的分類を用いて、初回生検病理組織の異型度別に臨床像、内視鏡所見、経過を検討した。また、観察期間中に UC-III が検出された 29 例の臨床像、内視鏡所見、経過についても検討した。

【結果】

420 例の臨床像は、異型度が高くなるにつれ、高齢、全大腸炎型、重症既往が有意に高率であった。内視鏡所見は、異型度が高くなるにつれ、隆起型病変が有意に高かった。発癌率は、異型度が高くなるにつれ上昇し、特に初回生検で UC-IIa 以上になると UC-I 以下の群と比較し有意に高率であった。また、若年発症群と炎症性ポリープを有する群において発癌率が有意に高率であった。観

観察期間中に UC-III が検出された 29 例では、うち 8 例に発癌を認め、UC-III 検出時から発癌までの観察期間中央値は 2.5 ヶ月 (1~43 ヶ月) であった。UC-III に限定すると、臨床像、内視鏡所見は、発癌率に有意差を認めなかった。

【考 察】

若年発症と炎症性ポリープを有する症例で発癌率が有意に高く、これは癌発生までに中等症以上の炎症が持続していることが推定された。内視鏡所見は発癌率に有意差を認めなかったが、隆起性病変を有する症例は発癌率が高い傾向にあった。初回生検の異型度が高いほど発癌率は増加し、特に UC-IIa 以上が検出された症例は有意に高かった。この事より、初回生検で UC-IIa 以上が検出された症例は、surveillance colonoscopy (SCS) の間隔を通常の年 1 回よりも短縮する必要があると考えられた。UC-III 検出後の経過は、観察期間中央値 2.5 ヶ月で 27.6% に発癌を認めており、UC-III が検出された場合は 2-3 ヶ月後に再生検する必要があると思われた。発癌症例は、短期間で UC-IV が検出された症例と、長期間 dysplasia 病変が残存しており内視鏡的粘膜切除術 (EMR) や手術で UC-IV が検出された症例であった。前者はすでに病変部や別部位に癌が存在している可能性が高く、UC-III 症例では短期間の再検とともに、複数回の生検にて UC-III が消失しない場合、診断的治療目的で EMR や手術も考慮すべきと考えられた。

【結 論】

若年発症や炎症性ポリープを有する症例、UC-IIa 以上の dysplasia は発癌率が有意に高率で、頻回な SCS による経過観察が必要である。Colitic cancer の前癌病変として有用な所見である、UC-IIa 以上の隆起性病変を有する dysplasia を早期発見することが colitic cancer の早期診断につながると思われる。